

# 中尊寺彫刻とその周辺 下

久野健

## 一六

次に、これら中尊寺等の彫刻の影響を受けて生れたと考えられる東北地方の彫像について述べてみよう。勿論、東北諸地方の彫像に影響を与えたのは、中尊寺の彫刻だけではなく、毛越寺、無量光院等の彫像も同様影響を与えたと考えられるが、今日両寺の彫像は、多く焼失し藤原まで遡り得るものは殆どなく、自然中尊寺を主として考えざるを得ないのが現状である。また、同じく影響といっても、きわめて直接的な影響と、間接的な影響とがあり、さらに、在地仏師の技倆が低いために模倣しても原型に遠くおよばず地方色が出たものもある。

こうした中で、最も直接的影響のもとに生れたか、あるいは、中尊寺等にきていた仏師の手になったものではないかと考えられる彫刻の一つは、立花毘沙門堂の二天像（図版Ⅴ、挿図56）である。立花毘沙門堂の二天もまた、中尊寺金色堂白水阿弥陀堂等の二天と同様、阿吽にわかれ、いずれも邪鬼の上にのり、片手を高くあげて、天を指している。吽形像は、総高一八五・二糎、寄木造、彫眼の像であるが寄せ方は不明であ

る。<sup>註五三</sup>カッラ材を使い、木地の上に布下地をおき、漆を塗り、金箔をおいた本格的な作り方であるが、現在は、金箔が殆ど剝落し、わずかに顔にのみ残っている。本体には破損は少ないが、踏鬼は虫喰がはげしい。阿形の方は、総高一六九糎、構造はほぼ同様であるが、この方は、両手指の先を失っている。両像は、二天像中の傑作で、面相も、男性的で力強いが、そうした中にも藤原時代特有の優美さがある。体軀は、かなり動的な姿をしているが、充分な安定感がある。いずれも量感にみちた天部像で、中尊寺金色堂中央壇の二天とは、また別系統の二天像を粉本として作られたものである。充分都風の表現が感じられ、あるいは中尊寺等に仕事にきていた中央仏師の手になるものかと思われる。制作年代も、基衡時代を下るものではあるまい。

宮城県の高蔵寺阿弥陀堂も、藤原様を残す数少ない遺構の一つとして著名である。この阿弥陀堂の内部には、現在二軀の阿弥陀如来坐像が安置してある。一軀（現本尊）は、像高二七二・七糎の像（挿図57）、もう一軀は、像高二六七糎の破損した阿弥陀如来像（挿図58）である。当初から、現在の阿弥陀像を本尊としていたものか、破損の丈六像が本来の本

尊だったが、後世いたんだために、現本尊に席を譲ったものかはにわか  
に決めがたい。現在の本尊像は、その顔面部が、後世、土地の仏師によ  
り削り直され、その上にあつく漆を塗ってしまっているために、その制  
作年代も、決めがたくなってしまっている。それに対し、破損の丈六阿  
弥陀如来像の方は、たいへんいたんではいるが、純粋な藤原様式を示

插图57 阿弥陀如来像 宫城 高藏寺

し、あるいは、この方が本来この阿弥陀堂の本尊像ではなかったかと考えさせる。

破損した阿  
弥陀像は、ハ

挿図56 二天像のうち阿形像  
岩手 立花毘沙門堂

に二材を寄せて作られている。両腿部には、また別木を寄せて作られている。以上の寄せ方は、前記した中尊寺旧本坊の本尊阿弥陀坐像及び峯の薬師堂の薬師如来像等の丈六像と全く同様の寄せ方であり、本像が中尊寺等の丈六像の影響をうけて制作されたものであることが分る。

単に本像は、かかる造法において、中尊寺丈六像に近似しているだけではなく、その頭部体躯のプロポーションや、面相も、きわめて正系の

b. 右側面 挿図58 阿弥陀如来像 宮城 高藏寺 a. 正面上半身

ルニレの材  
を使った寄  
木造彫眼の  
像で、前面

は、頭部  
 体軀は共木  
 で、それを  
 左右には  
 ぎ、背面も  
 また、頭体  
 共木で左右  
 にはぎつけ  
 ている。両  
 臂は別木、  
 膝前も別木  
 である、膝  
 前は、さら

藤原様を示している。眼や唇にみられる彫法も適切で、無駄なく、本像がかなり中尊寺像等の影響を直接的に受けて生れたものであることを物語っている。

さらに、もう一群の興味ある彫像群がある。それは、中尊寺に近い、松川の二十五菩薩堂に伝わる阿弥陀二十五菩薩(挿図59)及び飛天像(挿図60)等の群像である。阿弥陀如来像は、現在の像高一〇九糎、寄木造漆箔の像であるが、頭部が後世の拙劣なものに変わってしまったっており、破損もはげしく、制作年代の判定もむずかしい。これに附属していたもの

b. 其二

挿図59 菩薩像

a. 其一

岩手 二十五菩薩堂

挿図60 飛天像

岩手 二十五菩薩堂

と考えられる二十五菩薩像も、いずれも頭部を失った破損仏であるが、その自由な身のこなし、自在な衣文の彫出に、なみなみならぬ技倆が感じられる。いずれもやや胴長なのは、狭い仏壇上に多くの像を安置する必要からであろう。菩薩像の中には、胸に唐草の飾りをつけたものもあり、いずれも藤原の貴族好みの優美さを示しているが、こうした例は、京都・奈良地方の藤原仏にも、みることがない。

a. 正面  
宮城 観音寺  
挿図61 阿弥陀如来坐像  
b. 側面

いずれも、カッラ材の寄木造である。

飛天も、菩薩像におとらめたくみな表現がみられる。これも頭部が失われているが、あるいは、側面をむいて飛ぶ姿勢をとるものや、ななめ上方を向いて飛ぶ姿もあり、変化があるだけではなく、腰裳の衣文等も、また自由に刀を進めている。この飛天を先の

一字金輪大日如来像の天蓋の飛行の菩薩と比較すると、あるいは、二十五菩薩堂の像の方が、制作年代はややのぼるのではないかという風に考えられる。これらの像は、破損はげしいものであるが、京都成就院の遺像と共に、藤原時代のまれな二十五菩薩像として貴重である。

## 一七

これらの諸像よりは、やや下った頃のものとして注目すべき彫像に、宮城県気仙沼市・観音寺の阿弥陀如来坐像、観音寺に近い南流神社の菩

薩立像等がある。観音寺の阿弥陀如来坐像(挿図61)は、カッラ材の寄木造、像高は四三・一糎。頭部体軀を別木から作り、頭部は左右矧ぎ、体軀は、前面左右二材を矧ぎ、左側の材が左側面まで続いている。右側面はさらに一材、背面また一材から作られている。右腰下部に一材をはぎつけ、膝前、両腕等は無論別木である。

この像は、かなり修理が多く、全面に木屑の如きものをもりあげてしまっていて、にぶい感じを与えるが、なお、柔和な藤原様を残している。そのやや細おもての面相は、金色堂右壇の観音勢至に通じる特色で、本像が、藤原の末期頃の制作であることを示している。

南流神社の菩薩立像(挿図62)は、カヤ材の寄木造彫眼の像。像高は一〇〇糎、頭部、体軀は別木で、頭部は前後矧ぎ、体軀は一木で、両臂また別木、左腕は肘より先を失っている。右腕は、上前膊は別木、手首でまた別木となっている。体軀には、背面より背割をほどこし背板でおおう。両足は、付根のところまで体軀と共木であるが、前半は別木、右足先は新補である。表面には、所々に金箔が残っているが、恐らく制作当初からのものではあるまい。本像の衣文のほりはかなり適切でしっかりしている。しかし、その伏目でおもながな面相や細身の姿等は、観音寺の阿弥陀如来像と共に藤原末の制作であることを示している。

なお、もう一軀、北上市に住う岩沢寿子氏所蔵の十一面観音像も、小像ながら中尊寺彫刻の影響を顕著に受けて生れた彫像の一つと考えられる。本像は、もと附近の白山神社に伝来した尊像と伝えられている。

以上の諸像ほど直接的ではないが、白水阿弥陀堂その他の影響をうけ、在地の仏師により制作されたものではないかと考えられる彫刻群が



ある。福島県の浄日寺の諸尊像がそれで、これらの諸尊像は、もと附近にあった光山寺の尊像と伝えられている。

本尊の薬師如来像（挿図63）は、像高七五糎、カッラ材の寄木造の像、頭部、体軀を別木に作り、頭部は前後矧ぎ、胴身部は一木で背刳をほどこし背板をあてている。腰下の右側には、三角材をはぎつけ、右腕は、柄で体軀にとめている。胎内背面には、次のような修理銘がある。

奉修福 文和二日  
六月一日

仏子藤四郎

小仏子□□本

絵師覚山

現在、この

阿弥陀如来像

には、玉眼が

嵌入されてい

るが、両脇侍

及び二天も彫

眼であること

挿図63 薬師如来像

福島 浄日寺

挿図62

菩薩立像  
岩手 南流神社

から考えると、あるいは、これは、文和二年（一二三三）の修理の際に、行なわれた仕事かも知れない。破損がはげしい上に、面部も削り直しが行なわれ、きわめてひなびた作風になってしまっている。しかし、その体軀や衲衣の衣文等には、まだ藤原様を残している。現在は、左手に薬

挿図66 二天像 福島 浄日寺

挿図64, 65 薬師如来像脇侍像 福島 浄日寺

壺をとる薬師の姿になっているが、もともとそうであったかどうかは不明で、あるいは、阿弥陀如来像を、薬師にあらためたものとも考えられる。

本像よりもいっそう純粹な藤原の面影を残しているのは、本像の両脇侍（挿図64、65）である。現在右腕前膊を失っている像は、像高八九糎、寄木造の像。頭部、胴身部は別木で、頭部胴身とも前後矧ぎ、両臂は別木である。ゆたかな体軀と温顔をもった菩薩像で、よく藤原の正系の様式を示している。もう一軀の脇侍菩薩像は、像高八七糎、寄木の仕方は前記の脇侍とほぼ同様である。この両脇侍の面相や体軀、また腰裳の衣文等は、本尊薬師如来像ほど補修の手がはいっていないために純粹の藤原様を示している。またこの三尊の左右に二天が配されているのは、双林寺、中尊寺、白水阿弥陀堂、立花毘沙門堂の例と同じで、東北地方において、二天を配することが、いかに流行していたかを物語るものとして面白い。

二天像（挿図66）も、寄木造の彫眼の像、頭部、体軀は別木で作られている。像高は八九糎、惜しいことに破損が多く、口より顎にかけて欠失している他、裳の一部なども失われている。また、吽形だったと考えられるもう一方の天部は、頭部がなくなっている。この二天像を、先の立花毘沙門堂の二天や、中尊寺金色堂中央壇及び白水阿弥陀堂の二天像に比べると、身のこなしが硬く、単に制作年代がそれらよりも下るだけではなく、これは、新様の影響をうけた在地仏師の手になることを示すものではないかと考えられる。

これらの他、東北地方には、藤原末様を示す如来坐像が二軀みられ

られている。この像はきわめて純粹の藤原様を示しているが、小像であるし、後世中央からこの地に運ばれた像かも知れない。

もう一軀は、福島県・中善寺の薬師如来坐像（挿図68）である。本像はヒノキ材、寄木造、像高八七・九糎の像。頭部体軀は、同じく別木で、頭部は耳の後方で前後に矧ぎ、胴身部は、両側で前後に矧ぎ合せ、両腿部に別木を挿入している。膝前裳先等も別木である。また両臂及び手首も別木で作られている。本像の胎内には、宝永四年（一七〇七）の修理銘

b. 側面

挿図67 阿弥陀如来坐像

山形 慈恩寺

a. 正面

三八  
る。その一つは、  
山形県・慈恩寺の  
阿弥陀如来坐像  
（挿図67）である。  
本像は、像高五一  
・七糎、寄木造彫  
眼の像で、寄せ方  
は、頭部、体軀を  
別木で作し、頭部  
は左右に矧ぎ、体  
軀は前後に矧いで  
いる。膝前は別木  
両手も無論別木で  
ある。肉身部及び  
納衣は漆箔、切付  
の螺髪は群青にぬ

札が納入されており、それによると延慶三年（一三一〇）にも修理が行なわれていることが分る。いわゆる藤末鎌初の様式を示すものであるが、これも慈恩寺像と共に、中央で制作されたものであろう。

また、藤原様の影響を受けているが、それが地方化したような彫像もある。秋田県・観音寺の薬師如来立像や、福島県・泉福寺の大日如来坐像等がそれである。観音寺の薬師如来像（挿図69）は、像高九六糎、寄木造彫眼の像であるが、寄木の仕方は不明である。もとは、漆箔像かと考えられるが、現在は、すべて剝落し、素木像のようになっていいる。いたみはげしく、切付の螺髪も摩滅し、面部などいじられている。鼻先も後補のものである。かなり古い藤原様の影響を受けて生れた彫像と思われるが、地方化が著しく、実年代は推定しにくい。

福島・泉福寺の大日如来像（挿図70）は、体軀、頭部とも一木で作られている。それに両臂のみ別木で作り、はぎつけている。漆箔像であるが、体軀や衣文の表現も、充分消化しきれず全体にかたい。

挿図68 薬師如来坐像 福島 中善寺

一八  
以上が  
十二世紀  
に制作さ  
れたと考  
えられる  
中尊寺及  
びその周

も沢山にある。しかし、これらは、その前代の彫像に比べると次第に彫刻の生命力を失ってゆくのに対し、ここに、はつらつとした新様をもつ彫像群がある。中尊寺の彫刻群がそれである。さらに中尊寺新様の影響を受けて生れた彫刻もあり、東北地方の十二世紀彫刻は、多彩な変化をみせているが、何といっても、十二世紀頃の在銘像は一軀もなく、その後関係や様式の展開は、多少文献的に究明出来る中尊寺の彫刻の年代から考えなければならぬ。中尊寺彫刻中でも、文献的にその制作年代の

挿図70 大日如来坐像 福島 泉福寺

と、東北地方の十二世紀の彫像には、第一に勝常寺彫刻群や黒石寺の薬師如来坐像さらに成島毘沙門堂の諸像等、九世紀以来の古様の伝統をもつ、旧派の彫像群

挿図69 薬師如来立像 秋田 観音寺

辺の彫像である。いま、のべきたったこれら  
の彫像を  
ふり返っ  
てみる

推定がやや可能なのは、金色堂三壇の彫像である。

三仏壇は、中央壇が藤原清衡が天治元年に建立したもの。左壇は、保元二年に歿した二代基衡が造営したもの。右壇は、文治三年に歿した三代秀衡が造営したものと伝えられてきたが、最近の学説は、左壇が秀衡の歿年近くに、右壇が基衡によりつくられたものではないかと考えるようになってきた。しかし、明かに三壇の格狭間の孔雀や宝相華の文様等は、寺伝の通り、中央壇が最も早く、左壇これにつき、右壇が一番あとであることを示しているかにみえる。三壇上の仏像は、後補のものもあるが、おおむねそのような順序を示している。

三壇上の仏像を中央壇諸像を十二世紀前半、左壇を十二世紀中葉、右壇を十二世紀後半とする考えは、まさしく中尊寺には、中央の彫刻様式が、すこぶる早くにはいつてきていることを感じさせる。これを規準として、中尊寺のその他の彫像群の制作年代も、おおよそ推定することが可能である。

金色堂中央壇の阿弥陀三尊像にみられるように、中尊寺の諸像も、十二世紀前半においては、なお定朝様式の忠実な踏襲であったが、その中葉頃の制作と推定される経蔵の文殊五尊像や一字金輪大日如来坐像には、早くも玉眼の手法が見られる。玉眼嵌入のことは恐らく、都においてもまだ流行のきざしを見せた頃であろうと考えられる。また、十二世紀後半には、細身でやせ型の体軀をもち、衣文は複雑にみだれるような彫像が作られている。仏菩薩が、細身になるのも、京都奈良においても十二世紀後半もかなり進んだ頃であることは、円成寺の大日如来像や横蔵寺の大日如来像からも分る。

このように、中尊寺の彫像は、単に同寺の彫像や東北地方の諸像にある年代的規準を与える意味で重要なだけでなく、中央の十二世紀彫刻の制作年代を考える上にも一つの物指を提供するものと思われる。

北方の王者、藤原清衡、基衡、秀衡三代の間に平泉の地に絢爛たる華をさかせた中尊寺文化も、文治五年には、藤原氏とともに滅びた。しかし、なおこの地には、中尊寺、毛越寺、無量光院等の造仏に鑿をふるつた仏師たちの子孫が残っていたのであろう。建保元年の銘をもつ、岩手・光勝寺の阿弥陀如来像をみて、なお藤原様を色こく残している。しかし、もうこの頃には、鎌倉の地の寺院には、成朝や運慶の作った男性的な新様を示す彫像が、いくつも安置されていたのである。光勝寺の阿弥陀は、とり残された藤原様の名残をとどめているにすぎない。そしてさらに下った正応四年（一二九二）銘の中尊寺若女や老女の面には、すでに、土のかおりさえする。黄金の文化から土の文化へ——この地の彫像は、再び、黒石寺薬師如来像以来の土の文化へと帰っていったようである。

註五三 日本国宝全集六五輯解説による。

なお、この研究は、文部省科学研究費「藤原時代における古典様式の成立の研究」の一部である。この小論を書くにあたっては、中尊寺をはじめ本論文記載の各寺院、東北諸県の教育委員会社会教育課文化財係の方々、各地の仏像研究家及び同僚諸氏にお世話になった。なお、金色堂三壇及び諸尊の写真は米田太三郎氏の好意によるものである。